



TITLE:

天文歌考

AUTHOR(S):

富田, 良雄

---

CITATION:

富田, 良雄. 天文歌考. 第二回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録  
2012: 27-31

ISSUE DATE:

2012-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/158301>

RIGHT:

## 『天文歌』 考

富田良雄

山本天文台の第一研究室には漆塗り臙脂色の瀟洒な書棚があり、中には天文・暦法、和算関係の漢籍・和本が順序よく整理されて並んでいた。山本一清先生が大切にしておられた書籍ここにあり、という風格が感じられ山本章氏におねがいして書棚ごとそっくりそのままいただてきた。背の面をながめているうちにふと手にした黄表紙の和綴りの小冊子に見とれてしまった。「天文歌」と赤い題箋が貼ってある。気難しそうな背を見せて居並ぶ漢籍・和本の中で、これだけがなにやら穏やかな顔つきをしていたからである。調べてみると、明治以降の天文学の教育普及に果たしたこの本の役割が見えてきた。

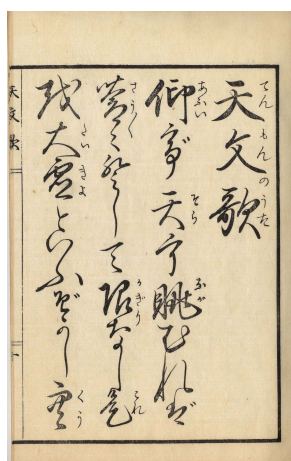


『天文歌』の表紙

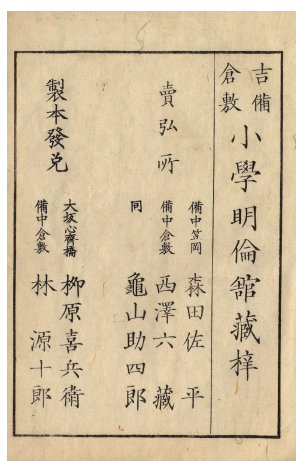


口絵（田中忠治刻）

これは明治七年（1874）二月に岡山の石阪秋朗が執筆し、倉敷の明倫小学館が刊行した教科書である。それも当時の天文学の知識を歌にして、生徒に唱和させ覚えさせるというユニークな発想の教科書である。最近はやった歌う生物学の教科書の元祖といえるだろう。サイズは 22.2cm×15cm で現在の A5 判に近い。扉には「仰而觀象」と揮毫あざやかである。これは暦書の「觀象授時」にちなんだ語であろうか。口絵は見開きの色刷り版画で倉敷かどこかの港で気球を見上げる人々の光景が描かれている。本文は十二丁（24 ページ）からなり、木版摺りの字は大きく 1 ページあたり 10 字×4 行であるから、全文でも千字に満たない。かな混じり文で漢字にはすべてルビがふってある。唱和して覚えるのに適当な長さの七五調の名文である。明治 5 年、時の政府が小学令を布告し全国に小学校創設をうながした直後の時期に刊行されている。ちなみに全国の大学図書館の蔵書を検索するとこの冊子は東北大学と筑波大学の図書館にわずか 2 冊所蔵されているのみの貴重書である。明治 6 年に太陽暦への改暦があり、『改暦弁』（福沢諭吉著）などの解説書が数多く出版されて一般人も天文・暦学に関心をもった時期であった。



本文の1ページ目



奥付き

本文の1ページ目を引用すれば

てんもんのうた  
「天文歌 /

あふい そら なが そうそう  
仰 で天を眺むれば / 蒼々とし

かきり これ たいきよ  
て 限 なし是 / を大虚といふぞか

くう  
し空・・・」

という名調子である。

この冊子の奥付には「吉備倉敷小學明倫館蔵梓、賣弘所 備中笠岡 森田佐平、備中倉敷 西澤六蔵、同 龜山助四郎、製本發兌 大阪心斎橋 柳原喜兵衛、備中倉敷 林源十郎」とある。倉敷は江戸時代通商の港として栄え、倉敷、笠岡ともに幕府代官所があった豊かな地域である。天保五年（1834）倉敷代官古橋新左衛門が代官所北側に倉敷教諭所を建て明倫館と名づけた。犬養毅らが学んでいる。慶応二年四月に長州奇兵隊の襲撃を受け倉敷代官所は焼けた。明治維新直後、備中の意気高き人たちが資金をだしあつて小学校を設立し、その教科書を自力で出版したと推測されるのである。森田佐平は書籍商を営み笠岡村の副戸長をしていた。明治六年に「小田県新聞」を発行している。佐平の息子思軒は『十五少年漂流記』、『レ・ミゼラブル』の翻訳家として知られる。なお明治六年から七年にかけて小田県管内で石坂秋朗著『天文歌』、佐伯義門著『山蚕養法』をはじめとして11点の教科書・実用書が出版されている。

備中から備後にかけての瀬戸内地域は天候がよく、天文愛好家の多い地域である。これには大正年間に設立された倉敷市民天文台の果たした役割が大きい。大原美術館を設立した大原孫三郎氏を中心とした市民の寄付により設立されたこの天文台は世に言う市民天文台の第一号であり、今も健在である。この天文台の設立に協力し、各地で天文講演会をおこなったのが山本一清先生であった。そうした活動が多くの天文愛好家を育て、またその中から宮本正太郎先生（尾道出身）のような天文学者が輩出した。今手元にあるこの教科書をめくっていると、自然と声にだして読んでみたくなるのも不思議である。岡山に天文学の愛好者が多いのは、明治初頭の学校教育にかけた地元の先人たちの努力があったからこそかもしれない。

変体がな本文には苦労したが、地元笠岡の山本稔先生、伊藤親之先生のご教示によりほぼ楷書体に置き換えることができた。また両先生からは岡山の教育関係資料のコピーをいただき倉敷明倫館の沿革が理解でき感謝する次第である。付録に天文歌の全文をしかけておく、縦棒にて改ページを示す。できれば復刻してみたいと考えている。

天文歌

仰あふいで天そらを眺ながむれば

蒼々そうそうとして限かぎりなし是これ

を大虚たいきょといふぞかし空くう

活くわつ至虚しきょにみゆれども

清澄せいちやうき稀微びの遊氣ゆうき有あり

遊氣ゆうきの外そとに太陽たいやうは

常つねに懸かりていつまでも

處ところ移うつさず其体そのたいは光明くわうめい

至大しだいの火球くわきうなり其その

全径ぜんけいは英国イギリスの八十

二万と二千百四十と

八里きありと聞きく水星すいせい

金星きんせい我地球わがちきう火星わせい木もく

星土星等別せいとせいなどべつに一二

の星ほしありて外圜ぐわいゐを

互たがいに巡めぐるなり此衆このしう

星の総名そうみやうを大遊星たいゆうせい

といふぞかし猶なほこの

外ほかに数々かずかずの小遊星せうゆうせいも

ありとしれ地球ちきうも同おなじ

星ほしなれば大遊星たいゆうせいの

ひとつなり近ちかく望のぞめ

ばその光分ひかりぶん明みやうなるは

大陰たいいんぞさて大陰たいいんの

其体そのたいは小遊星せうゆうせいの一いつに

して其全径そのぜんけいは英

国の二千と百と七十

五里地球ちきうと共に太陽たいやう

の外圜ぐわいゐを廻めぐり太陽たいやうの

光ひかりをうけておのず

から明闇めいあん昼夜ちゆうやの分わかち

あり地球ちきうは常つねに自

転てんして独樂子こまの廻まはる

に異ことならず自転じてん

の榛しんの両端りやうたんを南北なんぼく

極きよくというぞかし地球ちきうの

面めんが太陽たいやうに向うた時とき

が昼ひるなるぞ背そむいたとき

を夜よるとしれ其その一転いつてんが

一日いちにちぞ三百六十五転てん

して天てんの度数どすうを一いつ

周しうし元度げんどに復かへるが

一年いちねんぞ天度てんどは三百

六十度西どにしと東ひがしは経たて

なるぞ北きたと南みなみを緯ぬきと

知しれ中なかは赤道せきだう南北なんぼく

を南緯なんい北緯ほくいと名なつ

くるぞ冬ふゆは斜ななめに日ひ

を受うけて夏なつは直ただちに

日ひを受うける春しゅん秋しゅう二季にき

は平分へいぶんに日影ひかげを受うける

それ故ゆえに四季しきの更かはりも

有ありとしれ地球ちきうの面めん

の全径ぜんけいは皇国みくにの法ほう

の里数りすうにて壹萬まん

零々れいれい八十里日月地球じつげつちきう

の三体たいが同おなじ経緯けいゐ

の度どにあたり出会であう

た時ときが蝕しよくなるぞ小遊せうゆう

星せいは金星せいと我わが地球ちきう

とに一個ひとつづつ土星とせいに

五個もくせい木星よつに四個よつを

合あはせて十一個大遊こたいゆう

星せいに附属ふぞくして明暗めいあん

盈虚えいきよは大陰たいいんの地ち

球きうに於おけるとおなじ事

大小星たいせうせいの其外そのほかにまた

恒星こうせいの一種いっしゆ有遠ありとほく

望のぞめば一点いってんの螢ほたるのか

げに異ことならず是これは一ひと

個つの火球くわきうにてわが大たい

陽と同じ事俗に所

謂天の川衆恒星の

群集して河象を成

すに外ならず至遠の

天の外なれば其理

は知り難しまた彗

星の一種あり光芒

ながく尾を曳て甚

怪しき星なれど

また遊星の外ならず

其行道の長ければ

多年の後に壺度

づゝわが天頂を過る

なり彗星天に出る

時天災地妖の徴とい

ふ無稽の俗説笑

ふべし上に挙たる

略説は唯天文の一

般を童のために筆

記して窮理の門

の開き初其堂室に

入らむには他の博物

の書を見るべし

（「」は改ページをしめします。なお本文の解説にあたっては岡山の山本稔先生と伊藤親之先生のご教示を得ましたこと、厚く感謝いたします。）